



沖縄の戦争の歴史と今を学ぶ(伊江島研修)

JR東海労は2月25～27日、社会連帯機構の飯沼さんのご案内で沖縄平和研修を行いました。山田正彦元農相と共に、伊江島の歴史と米軍による有機フッ素化合物汚染について学ぶことができました。今号では伊江島の研修について報告します。

伊江島は、東西8.4km、南北3km、周囲22.4kmの小さな島です。沖縄戦では、「六日戦争」と呼ばれる激しい戦闘があり、日本軍約2,000人、村民約1,500人が戦死したと言われています。

戦後の1953年、アメリカ軍は伊江島で農民の土地を接収し、ブルドーザーで住宅を壊し、農作物を焼き払い約6割を米軍が強制接収しました。その返還闘争の先頭に立って闘ったのが、阿波根昌鴻(あはごんしょうこう)さんです。徹底した非暴力を掲げて、抵抗運動を展開したことから“沖縄のガンジー”とも称されています。

1961年には「伊江島土地を守る会」を結成し、「団結道場」を建設しました。そして基地撤去に向けた「わびあいの里」を開設し、反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」には、戦争中の生活用品や遺品、米軍の銃弾などが記録・展示されています。

阿波根さんは、戦争の愚かさと平和の尊さを亡くなる101歳まで説き続けてきました。その後、共に闘ってこられた謝花悦子(じゃはなえつこ)さんが引き継がれ、86歳の高齢ですが、今回、幸にもお話を伺うことができ、「戦争への怒りを忘れてはいけない」と力強く訴えられていました。しかし、現在でも伊江島の35%を米軍基地が占めたままなのです。その後、団結道場、芳魂乃塔、ユナバチク壕跡を見学してきました。

戦後80年を迎え、戦争の現実そのものが消え去り、過去の歴史となろうとしています。しかし、衆議院選で圧勝した自民党によって軍備増強と憲法改悪が現実のものとなり、戦後ではなく新たな戦争に向けた戦前へと進み出しています。伊江島での研修を通じて、二度と戦争を起こさせないために、労働者の連帯と反戦平和の闘いの必要性を改めて確認しました。

